



1



2

動物：牛，ホルスタイン種，雄，年齢不明（経産歴あり）。

臨床的事項：慢性乳房炎，左右の飛節内腫などがあり，治療を行っていた。外観として背部が隆起していた。その他異常は認められなかった。

剖検所見：脊髄の異常は，背部の隆起部に相当する胸髄から腰髄にかけて約12cmの範囲に起こり，この病変は空洞状で，脊髄の背側に位置し，水疱状に膨隆し，上壁は菲薄で，内部には透明な水様液を充満し，中心管が嚢胞状に拡張した状態である。また，脊柱背側の隆起部の椎骨は，脊髄の摘出時に異常を確認していないが，おそらく形態的に異常があったものと推測している。その他臨床的に認められた慢性乳房炎と飛節内腫の他，内臓では組織学的検索を含めて，軽度な胸膜炎と軽度なカタル性肺炎，心臓の住肉包子虫症，中等度の寄生性胆管炎（肝蛭症）と肝のアミロイド沈着症および慢性腎炎などである。

組織学的所見：最大の空洞部の所見は，空洞の下側壁内面の一部は中心管の上衣細胞からなり，この上衣細胞は圧迫され扁平化している。上壁は脊髄組織が圧迫され菲薄となり，内面上衣細胞はなく平滑である。更に，前記空洞部の前後の部位において，中心管は空洞に連絡なく（写真1），空洞形成の位置は，正中背中間部に相当

している。

これら空洞部の脊髄組織は空洞化のために圧迫され，位置により軽重の差はあるが，左右外側に圧縮され，左右の背角も認められ，背根からの脊髄神経が背角に達している。その他空洞に接近する脊髄組織は，水腫性膨化の状態を呈しているが，神経細胞はほぼ正常でニッスル小体をよく保っている。また大食細胞の出現は認められなかった。空洞より後部の，空洞化の起こっていない腰髄部では，灰白質の構造はH字状でなく，背側中央部に異常な組織があり，左右の背腹角が外側に偏し，中心管も異常を呈して3ヶ認められる（写真2）。

以上の所見より，本例は先天性の形態異常と考えられる。この疾病の神経症状は，空洞の位置と大きさなどにより異なり，本例の空洞部位は運動に関係のない知覚性の領域で，正中背中間部の空洞周囲に脊髄構成要素は圧縮されほぼ保たれていた。したがって，本症例において，臨床的に神経症状（特に運動障害など）は認められなかったが，その理由はここにあったものと考えられる。

診断：標本Aは脊髄空洞症syringomyelia(spinal dysraphism)と診断された。標本Bはartifactの所見である。

写真：LFB-HE染色，ルーベ拡大